

「現代中国学の新たなパラダイム：コ・ビヘイビオリズムの提唱」に対するコメント

秋山知宏

(愛知大学 国際中国学研究センター(ICCS) ICCS 研究員)

グローバル化時代の「地域研究」者は、地域に即した現場主義でありながらも、様々な時空間スケールの問題を包括的に考える力、すなわち目に見えないものも含めて全体を見通す力を備えなければならないと考える。

「現代中国学の新たなパラダイム：コ・ビヘイビオリズムの提唱」は、オリエンタリズムに加えて日本ナショナリズムの進行に対する批判であり、日中間の相互協力の基礎となるべき相互信頼の関係に歪みがあることに対する問題提起である。広く解釈すれば、「人間と人間との相互作用」に関心が払われている。

同時に、愛知大学 21 世紀 COE プログラム「国際中国学研究センター」(代表: 加々美 光行 教授)が実践してきたように、「人間と自然系との相互作用」という視点も含めて捉えなければならないと考える。なぜなら、近年、環境問題の顕在化に伴って、様々なレベルにおいて、国内外の政治や経済などに「環境」が強絡んできているからである。

グローバルなレベルでは、地球温暖化問題に対処することが重要課題となっている。CO₂ の排出量削減が目的に掲げられながらも、一方で CO₂ の排出権取引が行われるようになっている。さらに、エネルギー問題に対処するために、とうもろこしやさとうきびをはじめとする「食糧」からバイオエタノールなどの「エネルギー」を生み出す技術が開発された。食糧、エネルギー、環境、人間との間で、水をうばい合う状況が地域を越えて世界規模で生じつつある。こうした奪い合いの結果によって、途上国と先進国という枠組みとは無関係に、ある地域の人々が利益を享受する一方、ある地域の人々が犠牲になる。こうした地球環境問題の根源は、自然に挑み、支配しようとしてきた人間の生き方、いかえれば、言葉の広い意味における人間の「文化」の問題である。

また、リージョナルなレベルでは、中国の西部大開発や、その一環として行われている環境政策に代表されよう。多様な気候帯、多様な民族を抱える国家であるにもかかわらず、退耕還林や生態移民という様な政策が執られている。退耕還林は、CO₂ の排出権取引をして、経済的利益を享受する策の一つかもしれない。環境保全が大義名分となり、環境保全の名の下に経済開発が行われ、地域住民の生活や文化が犠牲となっている。本来の目的である環境保全が達成できないどころか、逆に悪化させている(秋山, 2007a)。また、節水政策の一環として河川水の取水制限を行った結果、農民は地下水を揚水することによって河川水を利用できない分を補っている。その結果、急激な地下水位の低下を引き起こしたばかりでなく、地下水が河川に流出する現象がほとんどなくなってしまったため、下流域の河川流量は減少し続けた。このように、問題に対して人間が不適切な対応をとることによって、予想しなかった新たな問題が生じる場合もある(Akiyama *et al.*, 2007)。そして、これらの政策の背景には、貧困の問題のみならず、とりわけ水資源をめぐる農業と遊

牧に代表されるような異なる生業間の相克があり、民族問題さえも絡んでいる(秋山, 2007b).

このように、環境問題が広く認識されて以来、環境をよくしようという人の活動が増えてきている。地球環境問題の解決のためにできることをやろうという気運が世の中に満ちている。でもその行動がどういふ結果をもたらすかということについて、注意深く観察し、深く考える必要がある。生半可な知識だけによる行動は、かえって環境の悪化に結びつくものもあるし、地域の人々を犠牲にすることもあるからである(中尾, 2006; 小長谷, 2006; 窪田, 2006 など)。こうした試みを実践しようとする人びとは、その土地の理想的な将来像を描く。しかし、それはそこに暮らす人々が本当に望んでいることなのだろうか疑問を持つことがある。つまり、それによって犠牲になることの方が価値は重く、結果として彼らが望まない将来像なのではないだろうかと感ずるのである。我々の認識と彼らのそれは多かれ少なかれ「ずれ」があるはずである。文化的な背景が異なるから当然であろう。現場に赴き、そこに暮らす多種多様な人々の口から得られる情報を通して、その場で起こっている問題をどう捉えるか判断することを忘れてはならない(秋山, 2004)。この私の理念は、コ・ビヘイビオリズムのベクトルと同じ方向を向いている。

以上から、グローバル化時代における地域研究の課題は、地域に即した解決策の提示であると考えられる。これは、グローバルな問題だけを対象とする現場主義ではない研究者にはできないし、個々の学問分野だけでもできないことである。したがって、手法の総合によって、地域の視点からグローバルな課題を掘り下げる学問分野であるべきであると考えられる。このような研究と実践の往復活動をすすめる上で、コ・ビヘイビオリズムはなくてはならない理念であると言える。

謝辞


「現代中国学の新しいパラダイムをめぐって」というきわめて大きな課題について、若輩者の私であるにもかかわらず、議論する機会を下さいました。ここに記して深い感謝の意を表します。

引用文献

- 秋山 知宏. 2004. IUGG2003 に参加して. 水文・水資源学会誌 17: 77-77.
- Akiyama, T., Sakai, A., Yamazaki, Y., Wang, G., Fujita, K., Nakawo, M., Kubota, J., Konagaya, Y. 2007. Surfacewater-groundwater interaction in the Heihe River basin, Northwestern China. *Bulletin of Glaciological Research* 24: 87-94.
- 秋山 知宏. 2007a. 中国乾燥地域の黒河流域における地下水涵養機構と水利用に関する研究. 2006年度名古屋大学博士論文, 120p.
- 秋山 知宏. 2007b. 環境問題に対する民族を越えた取り組み. 勉誠出版編, アジア遊学「地球環境を黒河に探る」, 勉誠出版, 126-129.
- 窪田 順平. 2006. 「植林」は沙漠化を防げるか? 日高敏隆, 総合地球環境学研究所編, 子どもたちに語るこれからの地球, 講談社, 41-56.
- 小長谷 有紀. 2006. 貧困削減の成功物語「井戸神話」を解剖する. 日高敏隆, 総合地球環境学研究所編, 子どもたちに語るこれからの地球, 講談社, 180-197.
- 中尾 正義. 2006. オアシスと水資源の思わぬ悪循環. 日高敏隆, 総合地球環境学研究所編, 子どもたちに語るこれからの地球, 講談社, 109-128.


愛知大学 071216

「現代中国学の新たなパラダイム： コ・ビヘイビオリズムの提唱」 に対するコメント

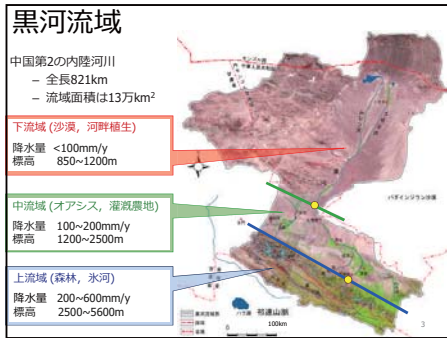
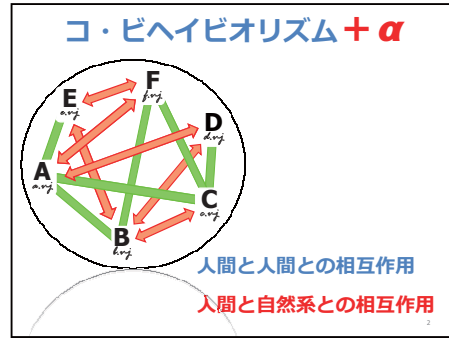


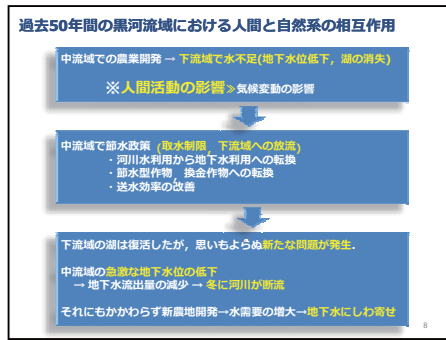
愛知大学
国際中国学研究センター

秋山 知宏
専門分野: 水文学(水循環)



1





- グローバル化時代の「地域研究」
- ・ 課題
 - 地域に即した解決策・予防策の提示
 - ・ 方法
 - 手法の統合によって,
 - 地域の視点からグローバルな課題を掘り下げて考察
 - ・ 「地域研究」者に求められること
 - 徹底した現場主義でありながらも,
 - 様々な時空間スケールで包括的に考える力,
 - すなわち, 目に見えないものも含めて全体を見通す力

